



駿河府中・静岡 ～原始・古代から近代まで～

本文・補足

2018年10月に駿府城跡天守台発掘調査によって、金箔で装飾された瓦と秀吉が築かせた天守台が見つかり、駿府城に再び興味を持った方もいるかと思えます。今回は、駿府城があった静岡（現在の静岡県庁周辺）についてまとめた教材を作成しました。静岡の歴史を学ぶ1つのきっかけとして御活用ください。

「駿河府中・静岡」に興味を持ち、資料を活用する場合は、歴史文化情報センターに御連絡ください。資料の利用案内をいたします。またこれまでに公開した「授業の種」についての御利用のお問合せもお待ちしております。

歴史文化情報センター

電話 054-221-8228

メール rekibun01☆tosyokan.pref.shizuoka.jp

rekibun02☆tosyokan.pref.shizuoka.jp

(☆を@に変更してお問い合わせください。)

スライドNo.2

賤機山古墳は6世紀中頃の古墳で、前方後円墳の墳丘に置かれた葺石や埴輪はない。後期古墳として、規模も墳丘、石室、石棺とも大きく、遺物においても他の後期古墳を凌駕するものがあり、被葬者が政治権力をもっていたことが推定される。15トンの巨大な石を使った横穴式石室と家形石棺をもち、金環(イヤリング)などの装身具、武具、土器(須恵器、土師器)等が見つかっている。

スライドNo.3

柚木山神古墳は駿河国最古かつ最大(全長約110m)の古墳で、被葬者は静岡平野の最初の統治者であったため、倭王権の王たちと同じ前方後円墳を築造した。

発掘により、竪穴式石室から鏡、銅鏃・鉄剣などの副葬品が多く発見されている。また、石鏃・砥石といった石製品も認められている。

発掘の結果から、静岡平野に分布する登呂遺跡をはじめとする遺跡群と柚木山神古墳は密接な関係があると推測される。

スライドNo.4

7世紀中ごろから、王権を中心とする国内体制集権化の機運が高まり、中央と地方を結ぶ交通の整備が進んだ。大宝律令の施行により駅伝制(伝馬と駅馬)が整えられた。

伝馬は都を中心に諸国の国府・郡家をつなぐ馬を使った継ぎ立ての交通手段で、郡家ごとに馬5匹が置かれた。駅馬は緊急・非常の場合の交通手段で、郡家と別に駅家が設けられた。

平安時代になると東海道の交通量は増大したが、労役を担う公民の負担が過重になると、駅伝制は衰退に向かった。平安中期以降になると、官営の駅伝制に代わって、民間の宿が出現して繁栄し、浄見長者(横砂長者、静岡市清水区)などの伝説が生まれた。

スライドNo.4 補足①

(注)駿河国府は、発掘調査の結果、現在の静岡県立静岡高校周辺とされている。

(注)平野部では直線道路が整備され、それを起点に条理の東西線が設定された。また静岡市の曲金北遺跡の発掘調査では、横田駅家と息津駅家(興津)を結ぶ直線道路が確認されている。

(注)片山廃寺は駿河国の国分寺、又は豪族の氏寺と推測されている。

(注)徳願寺・・・今川義忠の正室で北川殿開祖の寺院。

(注)(都と国・郡を結ぶ)官道の使用に伴う支出(駅家・郡家で食事)には正税(地方財源=租)があてられた。

スライドNo.4 補足②

駿河国府の左には現在の浅間神社がある。(スライドNo.2の賤機山古墳が隣接)

谷津山には柚木山神古墳(スライドNo.3)、有度山麓の川沿いの小さい集落が登呂遺跡の周辺にあたる。

地元にある古墳と遺跡を知る、古墳の大きさと支配地域の広さが比例する、スライドNo.3本文説明の要素をまとめると

《古墳時代前期の柚木山神古墳の被葬者の支配はどこまで?》

といった設問もあり得るだろう。(写真上部の庵原郡に全長65mの三池平古墳がある。)

(あくまで一例であり、古墳時代と奈良時代では地理的条件等が異なるため上記の問は不適切との御意見もありますが、一つの事例として考えていただきたいと思います。)

《比較の参考》

柚木山神古墳の大きさ(全長約100m) 百舌鳥古墳群大仙陵古墳(約500m)

賤機山古墳の大きさ(全長約30m、後期古墳の規模は縮小傾向)

柚木山神古墳と登呂遺跡の距離は約7キロ

スライドNo.5

駿府公園内の発掘で近世駿府城の遺構の下層から、15～16世紀前半の建物・庭園跡が姿を現した。戦国大名今川氏に関わり深い居館と考えられている。今川館跡からは国産の茶碗も出土している。武田氏の侵攻により、駿府の街が焼失した。

武田氏は江尻城、久能山城に拠点を置き、江尻城のあった清水区江尻には二ノ丸、大手などの地名が残っている。

今川氏は駿河国守護(遠江国守護の兼任もあった)であったが、南朝勢力などの影響もあり、完全に支配できていたわけではなかったが、今川泰氏の時に南北朝が統一され、今川範政の時に駿府を完全に支配したとされている。

スライドNo.6-1

父今川義忠が残党の一揆勢に討たれたため、嫡男の竜王丸(氏親)と一族の小鹿範光との間で家督相続をめぐる対立が起こった。義忠の正室北川殿の弟(兄とも)である伊勢新九郎長氏(北条早雲)は竜王丸側にたって奔走し、幕府に働きかけた。

氏親は義父となる中御門信胤(なかみかどのぶたね)や朝廷・将軍から重んじられた学者・歌人・能書家の三条西実隆(さんじょうにしさねたか)らと交流し、氏親は金を贈り、信胤は京都の文化的名品、実隆は氏親の和歌を添削した。

また、氏親と姻戚関係にあった公家が駿河に下向して永住することもあった。(例:氏親姉を妻とした正親町三条実望と公兄(きんえ)親子。)

スライドNo.6ー2

領国経営においては、今川かな目録を制定した。氏親自身が「自分が領国を支配してきた経験から、法典に定めておいたほうが領国のために良いと思われるものを密かに記しておいた」もの。

「現代の人々は悪賢くなって思いもよらない紛争が起こり、その訴訟が今川氏の法廷に持ち込まれるので、あらかじめそれに対応して、公平な判決を下すことができる裁判規範として、この法典を制定しておくのである。(中略)この法典の条項に基づいて判決を下せ。」と記されている。

☆当時の喧嘩の解釈と各々の領国(分国)における基準

喧嘩・・・武器を持って戦う私闘であり、報復はお返しの礼儀作法。

※伊達氏・・・仕掛けた方がより悪い故戦防戦法

※毛利氏・・・一対一の決闘による解決

スライドNo.6ー2 補足

喧嘩両成敗については、復讐感情を無視するものであったので、当時の人々に大きな抵抗があった。毛利氏が一対一の決闘による解決を定めたのは、この点に配慮したものである。（『静岡県史通史編2中世』）

※喧嘩両成敗法を採用した武田氏の事例には、文字通り両成敗に処す事例、父親の武功に免じて助命された事例（見せしめとして知行分を没収され、外様として扱われる）などがある。当事者双方から事情を聞き取った過程、事情を考慮した助命処分など、為政者として難しい判断を迫られた様子がうかがえる。

参照：「喧嘩両成敗法成立の放飼場の意義に関する一試論：戦国大名武田氏の喧嘩処理を手がかりとして」（河野恵一、九州大学学術情報リポジトリ）

スライドNo.7ー1

義元は氏親によって京都建仁寺から呼び寄せられた太原崇孚雪斎(たいげんそうふせっさい)に養育された。雪斎について上洛し建仁寺に入山した後も何度か駿河に下向し、歌会などを行い今川関係の文化人として中央と駿河国との重要なパイプ役を担っていたと思われる。

家督を継いだ義元は、翌天文六年(1537)2月10日、これまで敵対関係にあった甲斐国の武田信虎の娘を正室として迎え、駿甲同盟が成立した。しかし、逆にそれは同盟関係にあった北条氏との決別を表明することでもあった。今川氏と北条氏とは氏親一宗瑞(早雲)の代から同盟関係にあっただけに、外交上での大転換となった。北条氏綱は、報復行動として駿河国への乱入を繰り返し、「河東一乱(かとういちらん)」という抗争が始まった。

スライドNo.7ー2

義元は三河の松平氏の帰趨をめぐって尾張国の織田信秀と対立、北条氏との関係も友好的ではなかった。北条氏康は川越合戦の勝利によって領国を北武蔵まで拡大したが、上野国にいた上杉氏と対立、安心できる状態ではなかった。武田信玄も信濃平定のため東奔西走していた。今川・北条・武田の三者とも領国の後背に位置する河東地域(駿河国富士・駿東郡)の安定が不可欠であった。

このような状況下、義元の娘と信玄の長男義信へ輿入れ、信玄の娘と氏康の嫡男氏政との結婚、義元の嫡男氏真と北条氏康の娘(早川殿)との婚姻により、三者に縁戚関係ができ、駿甲相三国同盟が成立した。その後、義元は氏親の制定した分国法に二十一か条を追加、嫡男氏真に家督を譲り、三河国へ軍事的制圧に専念し、さらには尾張国への進出を企図して、信秀の跡を継いだ織田信長と対決した。

スライドNo.8

宗長は駿河国に生まれ、出家した寺院については駿府近郊の服織(はとり)の建穂(たきょう)寺と推定される。出家前後に駿河守護今川義忠に仕えるようになった。連歌の大成者宗祇は関東下向の途中、駿河国の今川義忠を訪ね、宗長は宗祇(そうぎ)を歌枕の清見関に案内された。都の文化人を接待するのは宗長の仕事の一つだった。

宗長は上洛し、宗祇に師事し、一休の許に参禅し、宗祇の供をして周防(すおう)国の大内氏を訪ね、宗祇と同座して連歌作品に名を連ねた。

今川家家臣斎藤氏の援助で丸子に庵を結んだ。現在の吐月峰柴屋寺(とげっぽうさいおくじ)である。

スライドNo.9

中村一氏(なかむらかずうじ)は豊臣秀吉に仕えており、天正十二年(1584)に和泉岸和田城主、天正十八年(1590)の小田原攻めでは山中城攻略で戦功をあげ、駿河国一国をあてがわれた。

岸和田城をあてがわれたのは、根来(ねごろ)・雑賀(さいか)などの紀州一揆に備えるためだったといわれており、武将として評価されていた。関ヶ原の合戦時は東軍で出陣予定だったが急死したため、息子の一忠が合戦に出陣した。その後、米子に転封(てんぽう、大名の配置換え)となる。息子の忠一に継嗣がおらず、改易(かいえき、職務交代と所領没収)となった。

スライドNo.10

内藤信成は三河国に生まれ、家康に仕えて数々の戦功を挙げた。天正十八(1590)年六月北条氏規(ほうじょううじのり)の守る葦山城を攻めて降伏させ、豊臣秀吉の命により、家康によって甲州より葦山城に封ぜられた。関ヶ原の合戦後に駿府城に入り、その後に近江国長浜城へ移った。

スライドNo.11,12

・スライドNo.10

天守台の石垣の高さは約12m(地面からの高さ)、天守台上部の平面は約54m(南北)×約47m(東西)とされている。12mは一般的な建物の4階に相当する高さである。

・スライドNo.11

上記の天守台に建設された天守閣を描いた「東照宮縁起絵巻」(日光東照宮宝物館蔵)である。大御所家康によって再建された駿府城天守閣は、五層七重の広壮なものといわれている。1635(寛永12)年に焼失し、その後再建されなかった。

スライドNo.13

明治初年、静岡学問所のお雇い教師のエドワード・W・クラークが撮影した駿府城天守台の写真。明治三(1870)年から明治九(1876)年にかけて、大手門をはじめ城の建物などは払い下げ(売却)と取り壊しが行われた。明治二十九(1896)年に第三十四連隊が設置され、駿府城跡に入った。この時、天守台は壊され本丸の堀も埋め立てられた。

エドワード・W・クラーク

静岡学問所の教師。勝海舟の招きに応じて来日。物理化学の教授所(=伝習所)を設立し、講義やダイナマイトなどの実験を行った。

スライドNo.14

明治元(1868)年10月、漢学・国学・洋学を統合した教育機関として府中(静岡)学問所が設立され、学問所頭に向山黄村(むこうやまこうそん)と洋学者の津田真道、以下教員には中村正直ら旧幕臣の知識人が名を連ねた。

幕府の蔵書(昌平坂学問所、開成所など)の多くが移され、当時の最高学府の一つであった。静岡学問所の蔵書は静岡県立葵文庫、静岡県立中央図書館へ受け継がれている。

中村正直

父は伊東・宇佐美出身の幕臣。静岡で『西国立志編』、『自由之理』を出版。福沢諭吉の『学問のすすめ』とともに当時のベストセラーとなった。

スライドNo.15

歩兵第三十四連隊は明治29(1896)年12月に創設され、翌年の3月15日に静岡駿府城内に移転した。静岡市が駿府城の献納を陸軍省に申し出て、本丸濠の埋め立て工事を負担した。

日露戦争、第一次世界大戦の山東半島出兵(青島攻略戦)、山東出兵、日中戦争に出兵し、日露戦争では出征約5000人の出征者のうち、1200人が戦地で亡くなった。

※日露戦争では、遼陽の首山堡(しゅざんぽ)の戦いで大隊長の橘周太(たちばなしゅうた)少佐が軍神と仰がれた。戦前、静岡第三十四連隊東門傍に橘少佐の銅像があったが、昭和19(1944)年に金属回収で供出された。

スライドNo.16

静岡御用邸は1900(明治33)年4月に落成し1930(昭和5年)12月に廃止となるまでの約30年の間に、明治・大正・昭和天皇が宿泊した。1902(明治35)年11月の大阪行幸の帰途に際して利用され、その後も明治天皇は度々御用邸で宿泊され、御用邸の二階から富士山を眺めて歌を詠まれたこともあった。廃止となってからは「名所」として大切に保管されたが、1945(昭和20)年6月の空襲により焼失した。